

# クローズアップ

対馬が好きだから



家具製作所「Kiira(きいら)」を開業した阿比留恭二さん優子さん夫婦

生まれ、育ち、そして暮らす、かけがえのない島「対馬」を少しでもよくしていきたい」「どうかしたい」と奮闘する人々

取り組み方は様々ですが、そこには共通点があります。そう、対馬が好きなんです。

そんな想いを今回探ってきました。



今年5月に家具製作所「スミ○(きいろ)」を開業し、間伐材を利用した対馬産ヒノキを生かしオリジナルの家具作りに取り組んでいる阿比留恭二さん(25歳) 優子さん(26歳) 夫婦。黄色の温い明るいイメージと木の色を大切にした家具が、今、人気を集めている。

## 憧れをもち自然に見つけた家具への道

対馬生まれで、対馬育ちの恭二さんは、上県町瀬田で生まれ、上対馬高校を卒業後、福岡市内の建築専門学校で2年間建築を学んだ後、福岡県大川市の家具製造販売会社に就職した。「小さいころから対馬で何かしたかった、物作りが大好きで小学校のころから職人に憧れていた」と夢を追い続け建築専門学校に通い、職人への道を歩み出した。しかし、いつしか建築関係の仕事に興味がなくなり、なぜか家具に心が引かれてしまうようになった。「建築の仕事は、設計、デザインをした後は、すべて大工さんまかせになるのがいやで、家具がいいんで

す。デザインして製作まですべて自分ができるし、仕事も没頭できる。何より一番自分の性格に合っているんです」と自分にとっての天職を見極めていくようだ。

## 自然の恵みは、磨き上げると光を放つ

福岡に在住している時も故郷への想いは絶えることがなく、家具製造販売会社で働き始めた時から既に、2年後は、対馬で家具屋をやりたいと決めていた。

独立を目指し、仕事が終わってから家具設計や仕上げ方など製作におけるすべてを一生懸命勉強。勿論、木の性質も習得し、改めて対馬産ヒノキのすばらしさを実感したようだ。

「対馬産ヒノキの特徴は、全国でもめずらしくピンク色と赤みがかった表情豊かな木目が一番の魅力。他のヒノキでは、なかなかでない味があり、温かな肌触りのある素材。結構粘りがあります」と対馬の厳しい自然が育んだ恵みに着目し、対馬産ヒノキを生かそうと考えていた。



島を離れ、別の角度で対馬を見つめ、故郷の雄大な自然の素晴らしさを感じる一方、その素晴らしさが利用されていない事に疑問を抱いた。

「対馬の豊富な素材が生かされていない。だから対馬で始めるんです」と話す恭二さん、「対馬の山は、間伐しなければ荒れてしまい、山が荒れると、土壌浸食や動物に悪い影響が出てきます。海外の材料に押され国産材が使われない影響もあり、切った材料を出荷しても赤字になってしまう状態なんです。だったら僕たちが加工し、付加価値を付け対馬産のヒノキがどんどん広まれば」と穏やかに

語る恭二さんの眼鏡の奥から島に対する熱い眼差しを感じた。

素材を大事に、  
こだわりを追求

デザインにもこだわりをもち、出来るだけシンプルで、少し特徴があるように心がけているようで、全てオーダーメイド。お客さんのイメージに合わせながらデザインを考えるため、同じ物が二つない、まさに世界に一つだけの家具が出来上がる。

デザインのアイデアについて尋ねると笑いながら「何も考えずに夢の中で形ができればいいのですが」と「家具製作で最初のデザインが一番大



変です。考えても考えても何も浮かばない時が一番きついですね」と言いながらも、常に利用者の気持ちと使っている人の笑顔を頭に描き、探求心を大事にしている。

仕上げは、出来るだけ木の温もりを大事に心がけニス塗料を使用せずオイルフィニッシュを採用している。恭二さんによると、「ニス塗料は、木の表面にプラスチックの膜を張るので、木が呼吸出来ないんです。木の香りもしないし、手触りもプラスチックと同じになってしまう。何よりも、環境ホルモンが含まれているので子供がアレルギーになるシックハウス症候群になる」と無垢の肌触り、香りを追求する一方で、「オイルフィニッシュ仕上げは、木にオイルをしみこませるため薄い膜ができるだけ、ニス塗料に比べ傷が付きやすい欠点があるんです。しかし、ニス仕上げで傷ついた傷は、その後、塗料が剥がれるなど不自然な傷になってしまう。オイルフィニッシュの傷は、使



うほどに味がでてきて自然と馴染んでいきますよ」と話してくれた。

毎日が楽しく、  
仕事も多彩

熊本県八代市出身の優子さん、恭二さんと同じ会社で働き、お互い木に対する価値観が近いのか、いつのまにか交際が始まった。「交際を始めたときから2年後は、対馬で独立すると言われました」と話す優子さん「物作りは好きです。楽しいです」とコースターや積み木、箸置き、箸な

ど小物を作っている。デザイン、色合い、木目を考えながら商品を完成させる。「作ってみて、アラツ」と思う時もあります。頭のイメージと、実際の商品が合っていないこともありました」と当初は四苦八苦していたようでした。

福岡の会社では、ホームページを開設、ネット販売もこなす傍ら、商品の撮影技術を写真家から習うなど、家具製作以外にも多彩な才能を発揮している。現在も自社のホームページを運営し、全国に商品のPRを展開、木の温もりと同じようにやさしいホームページが出来上がっている。ホームページ <http://ki-iro.jp/>

島だからできる  
逆転の発想

プレッシャーと不安からスタートした二人。「やるしかない、だれかがやらない」と話す恭二さん。開業後、少しずつ受注が増えている今も不安を抱えている。経営者として誰もが抱える重圧、だが「対馬は、疲弊しきっている。だからどうにか対馬に帰ってきて火をともしたい。若い人

がもつと帰ってきて欲しい、今の若い人が老後に対馬に帰ってきてもなにもならない。若い人が若い時に帰ってきてくれれば、島だから出来ないのではなく、島だから出来るんです。素材はいっぱいある。そこを生かし切れていないんです。僕たち夫婦が対馬で元気がやっているのを見て、若い人が『俺も』と、やる気になってくれれば、うれしいです」と謙虚に語る恭二さんの心の中には、対馬という一つの家具を作るため、革新的なアイデアを生み出す若き職人魂が動き始めているようだ。

